

〔課題演習報告〕

生徒が主題を明確にして表現を構想できる美術科学習指導方法の研究 —制作カルテを活用する授業を通して—

山 本 隆 文

Takafumi YAMAMOTO

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース
(2016年1月6日受理)

本研究は、生徒が主題を明確にしてその表現を構想できる美術科学習の指導方法を明らかにすることが目的である。そのため、主題の明確化に関する先行研究をもとに授業実践を3つ行ない、生徒の記述や作品から考察した。実践Ⅰ、Ⅱでは水墨、実践Ⅲではスクラッチの異なる題材で実践し、美術科学習に共通する有効な指導方法を究明していく。

キーワード：主題、構想、制作カルテ、美術科学習、指導方法、授業実践

1 はじめに

平成20年3月に出された中学校学習指導要領美術科編では、第1学年では「対象を見つめ感じ取る力や想像力を高め、豊かに発想し構想する能力や形や色彩などによる表現の技法を身に付け、意図に応じて創意工夫し美しく表現する能力を育てる。」、第2学年及び3学年では「対象を見つめ感じ取る力や想像力を一層高め、独創的・総合的な見方や考える力を培い、豊かに発想し構想する能力や自分の表現方法を創意工夫し、創造的に表現する能力を伸ばす。」が目標の中にある。また、美術の基礎的な能力とは、関心や意欲を基に、豊かな発想や構想をし、創造的な技法を働かせて作り出す表現の能力と、造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と表現の工夫などを感じ取り味わうなどの鑑賞の能力である。これらは基礎的・基本的な知識・技法、思考力・判断力・表現力を含むものであるとし、その育成には、生徒の主体的な学習活動の中でこれらが関連しながら十分かつ有効に働くようにすることが重要であると示されている。

しかしながら、美術科の授業において、生徒が美術の目標に向けて学習しているとは言えない現状がある。

このように上述した理由は、平成23年度国立教育政策研究所の特定の課題に対する調査による。同調査の発想や構想の能力の領域の、調査結果の概要において、①伝えたい内容について象徴的に

表すものを考え、その内容を表現できている生徒は約75%、②色や図の大きさ、配置のバランスから統一感のあるデザインを考え、表現できている生徒は約45%、③構図や構成を考え、中心となるものや表そうとする形、色彩、動きなどを整理し、強調したり単純化したりして発想や構想ができた生徒は約46%、という実態がある。これより指導の改善事項として、①表現の学習において形や色彩などの性質や感情効果を意識したり、イメージをとらえたりしながら学習を行う、②表現の学習を充実させるために、他者と意見を交換するなど言語活動を効果的に取り入れる、と記されている。

執筆者がボランティアや実習をした際においても、生徒たちの様子を見て上述したような実態があると感じた。この現状から生徒が発想し構想する力が発展していかないことが推測される。また、生徒は忠実な再現を目指しやすく、理想と実際の技術にギャップを感じ、苦手意識を持つことが考えられる。

2 研究の目的と方法

これらのことから考えれば、表現する主題が不明確なことにより、発想し構想する力がうまく働かず高まっていきにくいことが予想される。

この課題を解決するために、まず主題を明確にすることに関する先行研究を整理する。次に、明確化した主題の表現を構想する力が育つような美術科学習指導法の実践を通して、成果や課題を見つけ、方向性を見出していく。

3 先行研究

本研究における目指す生徒の姿とは、主題を明確にして、表現を構想できることである。

(1) 主題(表したいイメージ)とは

金子(2010)は「表現主題は感情(の表出)と像(対象の指示)とから成っている。」と述べている。また、「表現主題を作品の方向性と統一性を与える主観的な表現目標である。」と定義した。

光山(2012)は、新井が絵画における主題について、「作者が対象やモチーフから得た感覚や感情が、造形的な形式によって統一されることによって、はじめて表現内容つまり『主題』として形成される。」と述べたことを取り上げている。また、光山(2012)は、金子の定義する表現主題の場合、「主題は内的なイメージとして存在し、表現を前に進めるための目標として実際の造形活動の前段階では既にあるということになる。」とし、主題が制作活動の前にあることの重要性について述べている。

以上のことから、主題とは対象との関わりから表出した感情と受ける像により、創出したものである。また、主観的な表現目標としての意味もあることから、表したいイメージとも言える。

(2) 主題を明確にして

金子(2010)は主題を言語化することで、描きたいものを見出す手がかりを与え、主題を明確につかませるといった方法論を提唱している。つまり、主題を明確にするとは、表したいイメージを言語化できることが一つの姿であると言える。そのため、ものの特徴やよさを文章として書かせ、特定のものを選択したり組み合わせたりすることで主題が明確なものになっていくと考える。

(3) 表現を構想できる

美術科における構想とは、どのようなイメージを、どのような方法で表現するか計画を立てることである。その際、主題に合わせて、知識や技法を判断し選択するが、生徒は既習事項から選んだり、使えるものから選んだりする。よって、表現を構想するためには、明確な主題に加えて、知識や技法を知り、使えることが必要である。

(4) 制作カルテの活用について

光山(2012)は、制作カルテの活用について、「生徒一人一人の多様な特性に柔軟に対応し、主体的な活動を通して多角的に主題を検討させる指導法であると定義できる。」と述べている。ここでの制作カルテの構成は、主題を表現する文を書く、マインドマップを作る、スケッチを描く、友達や教

師からアドバイスをもらうなど、主題について検討するためのセクションがまとめられたものである。それぞれのセクションを相互に関連づけて参照することで、主題が多角的な視点で検討される。

さらに、制作の際に参照することで、生徒は自らの主題を確認しながら制作を進めることができ、教師は生徒の主題をより正確に理解し、適切な助言を行うことが可能になると述べられている。以上のような点から、制作カルテの活用は主題を明確にすることに有効であると考ええる。

4 実践を踏まえた提案

・実践の構想

そこで、主題を多角的に検討し、それをもとに知識や技法と照らし合わせるようなセクションを制作カルテに設けることで、表現の構想につながると考えられる。

主題の表現を学習内容などから構想することは、単なる作品づくりではなく、学習内容などを意図的に活用するため、作業的な活動から課題解決的な活動となる。ひいては、作品作りを通して美術科における基礎的な能力を高めることに繋がると考える。(図1)

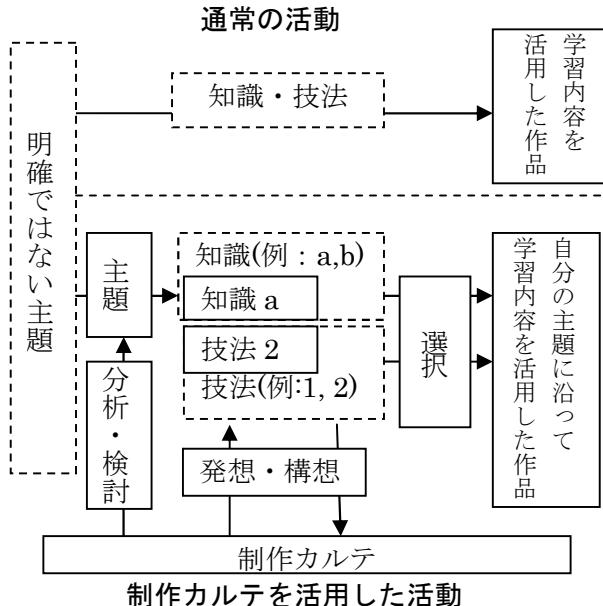


図1 通常の活動と制作カルテを活用した活動の流れ

上記した活動の流れをもとにした授業プロセスは以下の通りである(表1)。

① 主題を明確にする

主題を明確にするために、生徒が発想する手がかりとして、表現領域や題材を設定する。その上で、ものの見方について伝えたり気づかせたりして、多様なイメージや感情から主題を掴ませる。

②主題を表現する方法を知る・考える

主題を表現するための方法として、知識や技法について、参考作品で説明したり、実際に体験させたりする。これによって、生徒は自身の技能や主題にあった技法を判断し、選択できるようになることが考えられる。

③制作カルテで表現を構想する

実際に制作に入る前に、制作カルテで主題を検討し、表したいイメージについて考えさせる。主題を象徴するものを考え、表現する方法について、既習事項や当該題材の知識・技法から判断し、選択させる。教師が参考作品などで例を見せたり、生徒同士を交流させたりする活動を位置づけることによって、生徒同士が構想を共有し、自らの構想をさらに練らせる。

④制作カルテを確認しながら制作する

実際の制作で試行錯誤し、さらに発想し構想してより一層表現が深まることもあるため、制作途中においても制作カルテを振り返らせる。

表1 授業プロセス

生徒の活動		教師の関わり
①主題を明確にする		知識・技法の学習を位置づける
手がかり	ものの見方	
②主題を表現する方法を知る・考える		参考作品などで例を示す
知識を得る	技法の体験	
③制作カルテで表現を構想する		交流や振り返りを位置づける
主題	知識・技法	
④制作カルテを確認しながら制作する		
友達の構想	体験的な気づき	

このような授業プロセスをもとに制作カルテの活用を位置づけた実践を2つ行ない、修正していった。上記した授業プロセス③に焦点化した実践Ⅰと、その成果と課題を踏まえて①、②に重点を置いて③につなげる実践Ⅱを行い、総合考察した。以下、具体的に述べていく。

4-1 実践Ⅰの実際と考察

(1)授業の概要

「自分の考える桃太郎を水墨を使って表そう！」

①対象 福岡県公立中学校 第2学年

②実施時期 平成26年12月 全3時間

③本題材における実践の目標

自身が発想した桃太郎独自の活躍を表現するために、水墨の技法を工夫する構想を練ることができる。【発想・構想】

(2)制作カルテの項目(以下セクション)

・制作カルテⅠのセクション

セクション	ねらい
マインドマップ	独自の桃太郎を
主題を象徴するもの	発想させる
イメージスケッチ	

・制作カルテⅡのセクション

セクション	ねらい
どんな場面か	独自の活躍の発想と、表現を構想させる
特に大切にしたい部分	
友達からのアドバイス	
イメージスケッチ	
今後の方向性	

(3)授業プロセスと実践Ⅰの関係

①主題を明確にする(1時目)

物語「桃太郎」を手がかりに、独自に桃太郎像を設定し、独特の容姿や活躍などを考えさせ、制作カルテⅠにまとめさせる(写真1上)。

②表現する方法を知る・考える(2時目)

水墨の題材を学習した後であり、水墨の基本的な知識や技法は学習済である。そこで、想起させた桃太郎の物語を手がかりに、自分の桃太郎ならではの活躍などを考えさせた。

③制作カルテで表現を構想する(2時目)

独自の桃太郎の活躍をスケッチさせたり文章化させたりした。また、交流活動を位置づけ、友達からのアドバイスを受ける場を設けた(写真1下)。最後に今後の方向性のセクションで、交流を踏まえて、次の時間の見通しを書かせた。

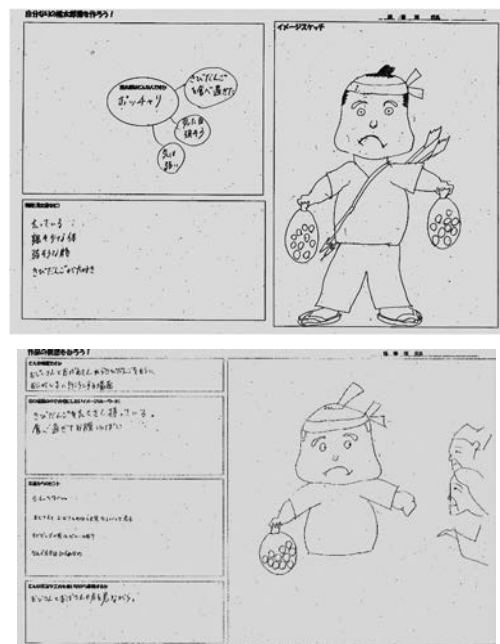


写真1 制作カルテⅠ(上)、Ⅱ(下)の生徒の記述

④制作カルテを確認しながら制作する(3時目)

制作カルテⅠ、Ⅱをすぐに見られる位置に置いて確認させながら制作させた。最後に鑑賞する時間を位置づけて、制作カルテと作品を関連して鑑賞する視点を示し、表現意図を読み取らせた。



写真2 生徒の作品の例

(4) 成果と課題について

【成果】

- ・桃太郎像や背景設定、場面設定と、発想する視点を設けることで、順序は個によって前後しながら主題を明確にする姿が見られた。
- ・授業において、発想したことをもとに制作カルテを活用して構想が深まる姿が見られた。
- ・自分の設定した桃太郎の特性をもとに、実際の物語の一場面から選択して独自の活躍を考える他に、物語をもとに自分の桃太郎の場合に起こりうる独特な場面を生み出した。

【課題】

- ・授業プロセスと制作カルテの連動をより明確にし、指導計画に位置づける必要がある。
- ・表現を実際に行うことで新たに発想したり構想したりする生徒も支援できる手立ても考える必要がある。
- ・題材における学習内容や、既習内容を意図的に活用した振り返りをさせる必要がある。

4-2 実践Ⅱの実際と考察

実践Ⅱについて以下のように考えた。

【継続した点】

- ・主題の明確化について、今回も描く対象の特徴やよさを言語化し書かせることにした。

【修正した点】

- ・主題を明確にする手がかりとしてのものの見方や、表現する技法を具体的に授業で伝えた。
- ・知識や技法を学習する体験を位置づけた。
- ・言語化した主題を表現するためにはどのような技法を使うか、表現を構想するセクションをそれぞれの制作カルテに位置付けた。

(1) 授業の概要

「美しい風景を水墨で屏風絵に表現しよう！」

①対象 福岡県公立中学校 第2学年 35名

②実施時期 平成27年 6月下旬～7月中旬

③本題材における実践の目標

主題をもとに、墨の特性を生かした表現を構想することができる。【発想・構想】

(2) 制作カルテの項目

実践Ⅱでは以下の制作カルテを活用した。

・制作カルテⅠ

セクション	ねらい
効果	色や質感、感情などを考えさせる
どんな描き方	線や墨の工夫に着眼させる
特性をどう活用するか	本題材の学習内容である運筆と調墨を自身の言葉でまとめさせる

・制作カルテⅡ

セクション	ねらい
イメージスケッチ	実際にスケッチしてみることで具体的に構想させる。
表したい様子	風景のどこを表現するか考えさせて主題を明確にさせる。
どのように工夫するか	主題にあわせて、運筆と調墨を活用した表現を構想させる。

(3) 授業プロセスと実践Ⅱの関係

①主題を明確にする(1時目)

題材を美しい風景にすることで、発想する範囲を絞る。導入で参考作品によって、同じ花でも技法によって印象が異なることに気付かせ、そのものらしさとその表現について考えさせた。また、どのような描き方によってどのような様子にみえたのか、制作カルテⅠにまとめさせた。

②主題を表現する方法を知る・考える(2, 3時目)

水墨の基礎的な知識や技法である調墨と運筆を、体験を通して学ばせた。さらに、導入で扱った花や、竹を模写させて発展的な技法についても体験を通して学ばせた。体験後、制作カルテⅠに加筆する時間を位置づけ、濃墨や直筆などの学習内容を記述させた。(表2)。

表2 生徒が記述した例

制作カルテⅠ		
効果	どんな描き方	特性をどう活用するか
とげとげしさ	線を細く 先を尖らせる	濃墨 直筆ではらう

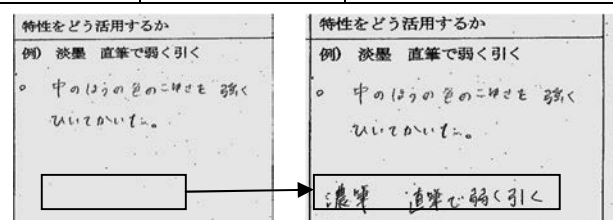


写真3 制作カルテの記述が増えた例

③制作カルテで表現を構想する(4時目)

参考作品をもとに、色、形、材質、遠近などのものの見方を伝えて対象を見る視点を増やす。また、参考作品とその制作カルテⅡをもとに、主題と表現の関係について示した。その際に、表現を構想する例として、強調・誇張、簡略・省略を示し、それぞれの作品の例を示した。

制作カルテⅡでは、どんな様子というセクションで主題を明確化させた。また、どのように表現するかというセクションで、調墨や運筆をどう使うのか、自分の言葉でまとめさせた(表3)。

④制作カルテを確認しながら制作する(5時目)

制作カルテⅡを確認するよう伝えて作品制作をさせた。墨の色や、線の引き方の確認として画仙紙に一度試し描きをしてから表現させた。スケッチの構図が生かされており、制作カルテⅠ、Ⅱに記述した内容のような、墨の特性を生かして作品に表現している(写真4)。

表3 制作カルテⅡに生徒Nが記述した例

どんな様子	どのように表現するか
・遠くの草が、湖に反射しているところ →実物は力づくよく、反射はよわく	・湖は、淡い色で描いて、木などの草は湖より濃い色で描く。 ・木から生えている草はかすれた濃い線で描く。

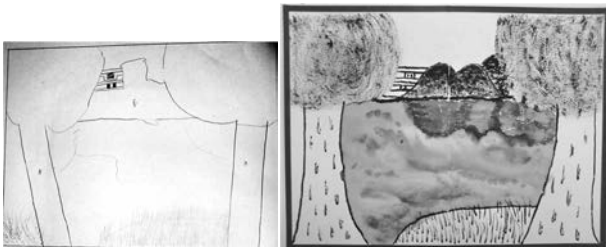


写真4 生徒Nの制作カルテⅡのスケッチと作品

(4)成果と課題

授業プロセス②で、制作カルテⅠの記述が増えた生徒が25名である。授業プロセス③後、制作カルテⅡについて、スケッチと、学習内容などを主題に合わせて活用した表現を構想できた生徒が27名、主題や工夫の文章が曖昧だが、スケッチをしている生徒が5名、主題のみを文章で書いた生徒は1人であった。

【成果】

- ・技法による効果の違いを実感し、制作カルテⅠに自分の言葉でまとめている。
- ・参考作品で示したもののよさや特徴などを具体的に意識して対象を捉え、具体的な知識や技法などの学習内容をもとにして表現を構想す

ることができていると言える生徒が全体における82%の割合である。

- ・制作カルテⅠの記述の増加を見ると、より多くの知識や技法から表現を判断し選択した点は、増加前より構想が深まったと考えられる。
- ・制作カルテで構想した自身のイメージに迫る表現が作品に見られる生徒がいる。

【課題】

- ・班活動がうまく機能しておらず、多様な視点の共有につながっていない。
- ・水墨で描くよさを実感する場が不足したり、技法の習得についての指導が不足したりして実践意欲が高まっていない。
- ・特性の理解をねらう参考作品の模写や、画仙紙に多様な技法を体験させる活動が、作品制作の見通しにつながっていない。

4-3 実践の総合考察と活動の流れの再構成

(1)総合考察

実践Ⅰ、Ⅱをもとに考察した。主題を明確にすることや、表現を構想するために有効な教師の支援の2点と、そこでの制作カルテに位置づけるセクションについて述べる。

【教師の支援】

1)主題を明確にする

主題を生み出す手がかりを与えること、対象を見る視点を持たせること、参考作品などで多様な主題の在り方を示すことが有効と考える。

2)表現を構想できる

知識や技法などの表現方法の学習を位置づけること、主題と表現の関係を意識させること、交流活動を活性化し、新たに構想を深める場を位置づけることが有効であると考えられる。

【制作カルテに位置づけるセクション】

1)での制作カルテは表したいものの特徴やよさを文章化したり、スケッチしたりするセクションが必要であると考察する。

2)での制作カルテは、どんな知識や技法を活用して主題を表現するのか、文章化するセクションが必要である。文章化することにより、交流活動で具体的なアドバイスを受けること、友達の構想から新たな視点を得ることに繋がると考察する。

(2)活動の流れの再構成

上述した考察に基づき、授業プロセスと美術科の学習過程との関係を整理した(表4)。これを踏まえて、下図のように活動の流れを再構成した(図2)。制作カルテの分析・検討については、発想、構想、表現において働きかけるものとして整理し、新たに次の2点を入れた。1点目は、主題のどのような

表 4 授業プロセスと美術科の学習過程

実践の位置づけ	美術科の学習過程
①主題を明確にする	感受・着想 発想
②制作カルテで表現を構想する	構想
③制作カルテ使って交流する	
④制作カルテを確認しながら表現する	表現

ところを表現したいのか考える、主題の明確化の段階を入れた。2点目は、制作カルテで分析・検討した構想を他者の視点などで批評して、よりよい構想へとつなげることをねらう交流を新たに入れた。以下、それぞれの学習過程に対応する実践について述べていく。

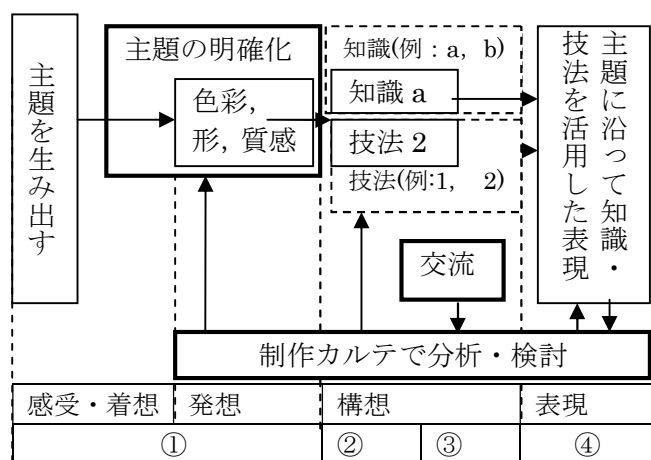


図 2 再構成した活動の流れ

①主題を明確にする

生徒が題材と出会い、知識や技法を学習する時間を位置づけることによって、生徒は主題を生み出す。そこで、主題を分析するセクションを制作カルテに設けることで明確にさせる。

②制作カルテで表現を構想する

主題に合わせて、知識や技法をどのように使うか考えさせるセクションを制作カルテに設ける。これにより、生徒にとって主題を表現するために適した知識や技法を判断し選択できるようにする。

③制作カルテを使って構想を交流する

生徒同士で構想を交流させ、他者ならどのように構想するかという視点を得ることによって、ものの見方を広げたり深めたりすることにつなげる。

④制作カルテを確認しながら表現する

実際に制作を進める中で、さらに発想し構想することで、より一層表現が深まることもあるため、制作途中においても制作カルテを振り返らせる。

4-4 実践Ⅲの実際と考察

上述したような、再構成した活動の流れをもとに実践Ⅲを行った。以下、具体的に述べていく。

(1) 授業の概要

「動きのある表現をしよう」

①対象 福岡県公立中学校 第2学年 35名

②実施時期 平成27年 11月中旬～12月中旬

③本題材における実践の目標

表したいイメージをもとに、スクラッチを生かした表現を構想することができる。【発想・構想】

(2) 制作カルテの項目

実践Ⅲでは、制作カルテは1つに絞った。

セクション	ねらい
問い1, 何をテーマにしますか	マインドマップで発想を広げさせる。
問い2, そのものらしさとは何ですか	象徴するものを選ばせる。
問い3, どのような様子をどのようにスクラッチで表現しますか	より自身のイメージに迫るための技法を考えさせる。
問い4, イメージスケッチ	線描することで具体的に構想させる。

(3) 授業プロセスと実践Ⅲの関係

①主題を明確にする

・主題を生み出す段階(1時目)

スクラッチの特徴である線描、黒と白の表現について参考作品鑑賞を通して気づかせた。その後、画用紙を黒のクレヨンで塗りつぶしたものを、生徒に実際にニードルで削らせる体験をさせた。

・主題を明確にする段階(2時目)

制作カルテに設けたセクションである問い1と2で考えさせた。マインドマップで生み出した主題からイメージすることを連想させ、その中から主題を象徴するものを選ぶ活動によって、主題のどのようなところを表現するのか明確にさせた。

②制作カルテで表現を構想する(2時目)

制作カルテのセクションである、問い3, 4によって表現の構想を練らせた。これによって、ただ線描するのではなく、何を表現するためにどのような線をどのくらい引くか考えさせた。また、イメージスケッチを描いてみることで、自身のイメージにより迫る表現の構想につなげるようにした。

③制作カルテを使って構想を交流する(3時目)

制作カルテに書いた構想をもとに交流させた。自身の主題とその表現について他者ではどう考えるかアドバイスし合い、その上で自身がよりイメージに迫る表現を判断し選択できるようにした。その手立てとして、制作カルテの各セクションを検討する視点を示した鑑賞カードを使って交流させた。これにより、アドバイスをもらって構想を深めたり、進行が遅れていた生徒にとっては、構想を進めたりする支援につなげた。

④制作カルテを確認しながら制作する(4, 5 時目)

2つのねらいで制作カルテを手元に置かせて作品の制作をさせた。1点目は1つ1つの線を引く際、ただ輪郭線を引くなどではなく、主題を表現することを意識してひかせる。2点目は、一度引いた線はやり直しがきかないため、作品を削る迷いや不安を感じた際、イメージスケッチで線を吟味して構想を再検討させることである。

(4) 実践の実際

〈制作カルテの記述から〉

記述を次のように分類した(図3)。

- ・全て記入(問い1, 2, 3, 4全て記入している。)
- ・スケッチのみ途中(問い1, 2, 3を記述しているが、問い4が途中の段階。)
- ・全体的に途中(セクションが2つ以上無記入で、表現の構想が今後現れると考える段階。)
- ・一部のみ記入(問い1のみ記入。主題の明確化や表現の構想を今後考える段階。)

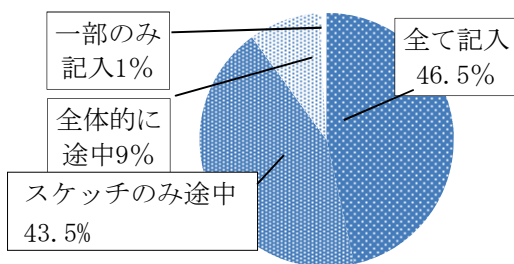


図3 授業プロセス②と③の、分類した割合の平均

授業プロセス②から③の後では、記述の割合は大きな変化は見られなかったが、細かく分析すると、表5のような変化が見られた。自身で問い1, 2, 3, 4で構想したものに加えて加筆したものを「記述増加」、制作カルテの記述に構想が具体的に見えない状態から、構想を見ることができるようになったものを「構想の進行」、主題が変化したり、スケッチの構図が変わったりなどの内容が異なるものに変わったものを「記述変化」と分類した。

表5 記述内容の変化

○記述増加 8名/35名			
全て記入	問い3, 4を加筆	1名	
	問い3を加筆	2名	
	問い4を加筆	2名	
	問い3を加筆	3名	
○スケッチのみ途中			
○構想の進行 3名/35名			
全体的に途中→スケッチのみ途中		1名	
スケッチのみ途中→全て記入		2名	
○記述変化 4名/35名			
大幅変化(主題変更)		2名	
スケッチの構図変化		1名	
文章の減少		1名	

〈授業後のアンケートの記述から〉

次の4つの視点、①制作カルテの有効性、②交流による構想への効果、③交流について、④本題材の表現についての所感について、アンケートを用いて聞き取りを行った。

①質問：制作カルテを使うことは、作品制作に役立つと思いますか。

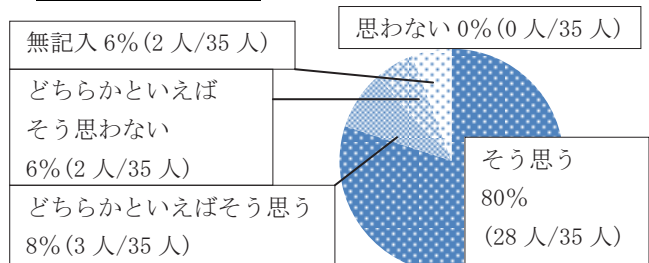


図4 ①についての回答の割合

表6 ①についての項目ごとの記述

○そう思う、どちらかといえばそう思う	
イメージしやすい	16名
自分の考えを残せる	9名
考えを整理・まとめられる	5名
実際にスケッチして検討できる	1名
○どちらかといえば思わない、思わない、無記入	
言葉にする難しさについて	3名
絵にする難しさについて	1名

②質問：この交流であなたの考え(構想)にどのような効果がありましたか。

表7 ②についての記述

工夫したらいいところが見つかる	14名
他の考えが浮かんだ	6名
自分にとってよかった	14名
むしろ迷った	1名

③質問：制作カルテを使った交流について、感じたことや思ったことを書いて下さい。

表8 ③についての記述

アドバイスをもらえた	18名
他の人の考えを知ることができた	12名
アイデアの適否がわかった	3名
1人ずつ順番ごとに発表せず時間短縮になる	1名

④質問：アートスクラッチを制作して、表現したいものにはこのような特徴があり、このような表現がいいと考えて制作できたと思いますか。

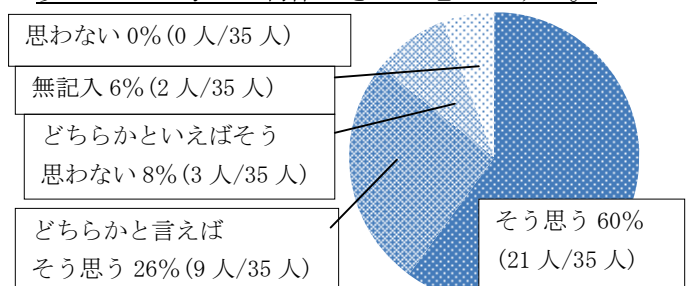


図5 ④について回答の割合

〈生徒の作品から〉



写真5 生徒U(左)と生徒H(右)の作品

生徒Uは羽根や嘴の質感の違い、生徒Hはパンダの柔らかい毛並など、意図的に線描している。

(5) 成果と課題

【成果】

- ・制作カルテの記述と、事後のアンケートの結果から、制作カルテの活用は有効であると考ええる。
- ・本題材のスクラッチの表現について、それぞれの制作過程で、自身のイメージに迫る表現であると考えている生徒が多数いることから、主題を明確にして表現を構想できたと考えられる。

【課題】

- ・文章力が低いと、スケッチにたどり着かない。
- ・交流の際、スケッチが途中で具体的に構想が見えなく、生徒同士がアドバイスしにくい。
- ・交流後、自身で構想する時間が不十分である。
- ・作品の制作までに、発想し構想することに加えて交流する時間を設けたため、作品完成に向かう時間が不足した。

5 研究の成果と課題

本研究を通して、制作カルテを活用することで、生徒が内に持つ主題をより明確にし、その表現を構想することに繋がる点が分かった。また、作品の完成ではなく、生徒がそれぞれの制作過程において、自身のイメージに迫る表現に着実に近づいていると感じることができている。

その半面、主題の明確化や構想に当たって、支援が必要な生徒への手立てを取り入れる必要があることがわかった。

また、交流させる際、どのようなことを表現したいのか、見る生徒が分かるように少なくともスケッチを描きこんだ状態まで揃えることも必要である。可能な限り同じ進行の状態で交流し、それを経て自身の考えを振り返ることができるようにすることが課題として明らかになった。

このような課題を踏まえ、主題の明確化の段階において、スケッチから先に取り掛かることに統

一するなどして解決していきたい。また、言語化の難しさへの手立てとして、参考の言語など手引きを用いて支援していくなどを講じていく。

6 おわりに

生徒は発想や構想、制作などのそれぞれの段階で、自身のイメージに着実に近づいていると感じている。これは、知識や技法を主題にあわせて判断し選択するような活動が、生徒にとって意義のあるものであると感じていることを表している。この学習指導方法が定着することによって、単なる作業的な活動ではなく、課題意識や目的意識を持った活動になり、生徒の発想し構想する力が高まることにつながる。ひいては確かな学力の要素である思考力・判断力・表現力を美術科においてもより育成できると考える。

また、生徒が単元における各時間について見通しを持つことにつながる手応えを感じた。具体的には、生徒が自身のイメージにより迫る表現をするために、交流でアドバイスをもらえるよう、家で制作カルテの記入を進めるなどして発想し構想を深めることである。これによって、少ない美術科の時間における活動がより充実することに繋がると考えられる。

さらに、教師は制作カルテの記述を見ることで、各時間において生徒がどのように考えを変容させ、なぜそのように変えたのか捉える手立てとすることができ。教師が美術科学学習の評価において、作品の完成のみに頼るだけでなく、各時間の活動の成果をよりきめ細かく評価できる。

今後も上述したような成果と課題を踏まえてこの研究を続け、主題を明確にして表現を構想する力を高めることができる美術科学学習指導方法を究明していく。さらに、多様にある他の題材や領域にも対応できる学習過程や指導の在り方を明らかにし、美術科における学習の充実に貢献することを目指す。

7 主要参考文献

- 金子一夫 2010 表現主題を感情と像の言葉で分析・構成させる美術教育論 茨城大学教育学部紀要(教育科学) 59号(2010), 47-64
- 光山明 2012 表現主題を多様な視点から分析的に検討させる学習指導の試み ―題材「ねがいをかなえるお守り」におけるワークシートの開発を通して― 美術教育学会誌 33, 2012, p201-214